

## てんかんの診療と研究に携わって

名古屋大学名誉教授

渡邊一功

私は昭和 38 年に名古屋大学医学部を卒業し、1 年間のインターンの後小児科学教室に入局し、同時に大学院に進学しました。小児科を選んだのは、子どもの成長と発達の素晴らしさに惹かれたからでした。その当時の大学病院は、難病ばかりでなく現在は一般病院でみている様な急性疾患も多くて大変忙しく、最初の 2 年間は主に一般診療に従事しました。その後は小児神経を専門領域とし、神経外来を担当するとともに、小児神経疾患の中で最も多いてんかんについて研究することにしました。当時ビタミン B<sub>6</sub> 欠乏ミルクで乳児に痙攣が多発したという報告や、ビタミン B<sub>6</sub> が代謝の各段階で補酵素として関わっているトリプトファン代謝異常が点頭てんかんみられたとの報告などがあったので、それ以外のてんかんにおいて血中ビタミン B<sub>6</sub> および尿中トリプトファン代謝産物の測定を行いました。前者では異常例はなく、後者で一部の例に異常を認めました。

大学院終了後は、点頭てんかんの終夜脳波による検討を行い、REM 睡眠における速波群発と発作の出現を発見しましたが、膨大な記録のため睡眠解析まではできずじまいでした。また、当時新生児痙攣によく遭遇し新生児脳波の必要性を痛感していましたが、その方面での知見が乏しいことを知り、上記の研究が一段落したところで、新生児脳波の本格的研究を行いました。胎生期後半における脳の生理学的発達についてポリグラフによる研究するとともに、新生児痙攣についての臨床脳波学的検討を行い、周生期障害の診断、病態発生の解明、予後の判定などに新生児脳波を応用しました。また新生児痙攣が年長児の発作と異なりしばしば REM 睡眠から起こることをはじめて記載しました。さらに、上記の研究に加え、乳児期、小児期に発症したてんかん患児を経年の観察していくことにより発達による様々な変化を明らかにしてきました。これらは完成された個体ではみられないダイナミックな変容であり、小児疾患は常に発達の観点でみることによって病態生理の解明に迫ることができることを知りました。また、West 症候群の発症過程を新生児期からの経時的追跡によって明らかにし、さらに発症後の長期経過の観察によりその変容過程と予後因子を明らかにしました。また終夜ポリグラフ記録をもとに、発作間欠期ならびに発作時脳波を詳細に検討し、さらに脳ブドウ糖代謝をみることによりその病態生理に迫ることができました。また乳児期発症のてんかんや複雑部分発作をもつ部分てんかんは予後不良とされていましたが、詳細な観察を行うことにより複雑部分発作をもつ良性乳児部分てんかんの存在を明らかにしました。てんかんの患児を長期にフォローすることによって一時期には難治と思われても思春期以後になると軽快するものがあることを知りました。

私は常に目の前にいる患者さんの問題を解決するには何をすべきかという観点で臨床研究を続けてきました。慢性疾患の子どもを長年縦断的にみてきて感ずることは成育医療の重要性です。成育医療とはヒトがヒトとして心身共に健全に成長を遂げていく過程を支援していく医療です。これはライフサイクルとして捉えた医療で、単に人生の一局面のみを捉えた医療ではありません。子ど

もを診るとき、その子が大人になった時のことを考えながら医療を行う医療であります。てんかん発作のみに目を奪われず患児の発達にも目を向けることが重要だと思います。難治てんかんの患者さんで不幸にも亡くなった方のお母さんの手記や、成人になり治癒した患者さんから子どもの時からどのように感じてきたかについて詳しい手紙を頂き、病気をもつ親の心理や患児の心理についても学ぶことが出来ました。臨床医にとって患者さんから学ぶことは常に真理であると思います。